第44回歴史講演会

日本とトルコ友好１２５年の物語

沖周（おきしゅう）とエルトゥールル号遭難事件

トルコは世界一の親日国

軍艦エルトゥールル号

遭難現場　樫野埼沖　船甲羅

沖村長が記した日記／村の医師からトルコ政府宛の手紙

皆様のご参加お待ちしています

◆トルコ共和国は世界一の親日国です。何故日本から遠く離れた中近東の国が親日国なのか。そこには今から126年前に築かれた日本とトルコの深い友情の絆がありました。◆1890年（明治23年）9月16日和歌山県樫野崎沖（現：串本町）でオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が台風の影響で遭難、沈没し５８７名の犠牲者を出す大惨事に見舞われました。知らせを受けた大島村村長、沖周（おきしゅう）は直ちに行動を起こし、村民を指揮して救護活動に全力を尽くし６９名が救助されました。◆生存者はやがて神戸に移され、明治天皇の命により軍艦２隻をもってトルコに無事送り届けられたのです。◆この大島村総出の献身的行為はトルコ国民の心を強く打ち、教科書にも載せ今日まで伝え続けており、以来トルコは熱烈な親日国なのです。◆串本町には慰霊碑とトルコ記念館があり、現在もトルコ大使館との共催で５年毎に追悼式典が行われています。

◆この実話には続きがあります。裏面も是非お読み下さい。

神戸にて日赤の救護班と乗組員

エルトゥールル号殉難将士慰霊碑／両国の国旗と錨のマーク

串本町のトルコ記念館

日本トルコ友好125周年祝賀会

講師：岡田幹彦氏（日本政策研究センター主任研究員）

■プロフィール 昭和21年北海道生まれ。国学院大学中退。
学生時代より日本の歴史、人物の研究を続け、月刊『明日への選択』に人物伝を連載中。「歴史街道」「歴史通」などにも寄稿。
平成21～22年産経新聞に「元気のでる歴史人物講座」を連載。
全国各地で歴史人物の講演活動を行う。

■著　書　『東郷平八郎』『乃木希典』『小村寿太郎』（展転社）
『日本を護った軍人の物語』（祥伝社）
『日本の誇り103人』（光明思想社）他多数

と　き：**4月 23日（土）** 午後2時～4時30分

ところ：**仙台市シルバーセンター** 6階・第2研修室
青葉区花京院1-3-2　仙台駅西口徒歩8分・東北電子専門学校隣り

参加費：一般1,000円・学生無料（学生証を提示下さい）

主　催：宮城ビジョンの会　TEL022(285)3383

後　援：宮城県教育委員会・産経新聞社東北総局・日本会議宮城県本部

＊1時15分～受付開始
書籍の販売等もしますので是非お早めにお越し下さい。

＊当日、関連映像も合わせて上映します。

是非お誘い合わせの上ご参加下さい！

今も続くトルコ国民の感謝

日本トルコ友好125周年事業の エ号乗組員追悼式典で献花するトルコ大国民議会のジェミル・チチェッキ議長

安倍首相を表敬訪問した同議長（平成27年6月）

「125年前のわが海軍殉難将兵に対して献身的な救助活動をしてくださり、手厚い介護をしてくださった日本国民の祖先たちの御霊の前で、深く感謝の意を表するとともに、彼らがこれから永遠に続くトルコと日本国の友好の守護神であることを、心の底から祈っております。
安らかあらんことを。」

ジェミル・チチェッキ・トルコ大国民議会議長
平成27年6月3日
和歌山県串本町「１２５周年追悼式典」での挨拶

エルトゥールル号から９５年後の恩返し

1985年(昭和60年)3月17日。イラン・イラク戦争の渦中、イラクのフセイン大統領は「48時間後にイラン上空を飛ぶ飛行機は全て攻撃する」と発表。諸外国はイラン在住の自国民救助のために救援機を派遣します。

しかし日本は安全が確保されないとの理由で民間機はもちろん自衛隊機も救助に出しませんでした。

諸外国は当然自国民救助が優先のため日本人を乗せることは拒否されました。在留邦人215名は日本からも外国からも完全に見捨てられたのです。

あと数時間で期限切れとなる3/19、トルコ航空機2機がテヘラン空港に到着しました。何と日本人215名を救助してくれたのです。危機一髪で救われました。95年前の恩返しでした。

日本人を救出したトルコ航空DC10

サダム・フセイン

現在NPO法人「エルトゥールルが世界を救う」特別顧問

「警告の時間が迫っていて、救援機といえども打ち落とされるかもしれない。そんな危険な中、外国人である日本人をトルコ航空が命がけで助けに来てくれました。私にとって、トルコは命の恩人です。トルコの皆さんが、私たち日本人にしてくださった真の友情を、決して、忘れ去られることのないように、日本の人々に語り継いでいきたいと思います。」

沼田準一・元イラン駐在日産自動車社員（左写真）
2010年9月27日「日本・トルコ友情コンサート」での挨拶

エルトゥールル号事件とトルコ航空による邦人救出を描いた映画「海難1890」は、安倍首相とトルコ共和国のエルドアン大統領の協力も得て制作されました。

トルコで両首脳が共に試写会を鑑賞し、安倍首相は「『海難1890』は人類に普遍的な勇気と思いやりの物語であると共に、エルトゥールル号事件125周年、トルコ航空による日本人救出30周年という記念すべき年の集大成といえる作品であると思います。」と挨拶しました。

どうして日本が日本人を助けられないんですか？

映画「海難1890」女性教師の台詞より

Q: 他国はそれぞれ自国の民間航空機や軍の輸送機が救援に来て順次脱出していきました。
どうして日本だけがイラク在住邦人215名を助けられなかったのでしょう？

A: 昭和60年当時、社会党等の野党の反対が強く自衛隊が海外に行くと言うことは戦争につながるという意見が強かった為、こういう事態を想定して輸送機等を配備する事が許されませんでした。自衛隊の外国に於ける活動を人道目的も含めて想定できず、政府専用機すら持っていませんでした。（1987年2機導入決定）

Q: その後は改善できたのですか？

A: 自衛隊法は逐次改正されたものの、あくまでも邦人の「輸送」が目的のため、安全確保が得られない紛争地域では、「見捨てられた日本人」は他国の救援機に「助けてもらう」しかありませんでした。

Q: 昨年成立した安全保障関連法では日本人を救えるようになったのですか？

A: 安全保障関連法で自衛隊による邦人の「救出・保護」が可能になったものの、その為には①戦闘行為が行われていない事②当該国の同意がある事③当該国の連携協力がある事の3要件が必要であり、これでは事実上紛争地域での邦人救出は不可能です。ノンフィクション作家門田隆将氏は著書「日本遥かなり」で次のように述べています。
「日本は自国民の生命を『他国に委ねる国』になったのだ。」

Q: どうして日本だけがこんなややこしい事になっているのでしょう？

A: 憲法9条が手かせ足かせになっています。紛争地域への自衛隊の派遣は救助活動すら憲法が禁止している武力行使につながる恐れがあると言うのです。

国民の生命と憲法9条、どちらを守るのが大切なのでしょうか？国民の選択と決断が、今問われているのです。